

言語能力向上推進校 報告書①

1 はじめに

今年度は「三小メソッド」を活用した指導をさらに推進し、言語能力全体をバランスよく高めていくことが中心課題であった。最終年として「言葉を大切にする学校」「言語能力育成カリキュラム」の体系化を確立し、その効果を検証した。

2 言葉を大切にする学校 その1【人権教育…三小しぐさ】

昨年度、児童の思いや考えを表現する場として、児童による『人権集会』を設定した。今年度は『三小しぐさ』に取り組んでいる。三小にとって大切にしていきたいもの、三小の子供たちが目指したい心の有りようを『三小しぐさ』として“言葉で表現”するものである。各学年・各学級で自分たちを見つめ、言葉を練り上げていった。

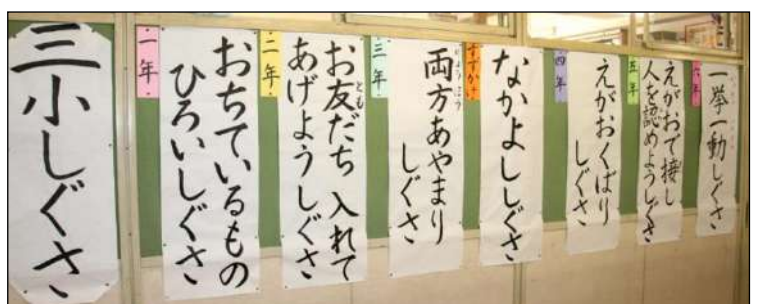
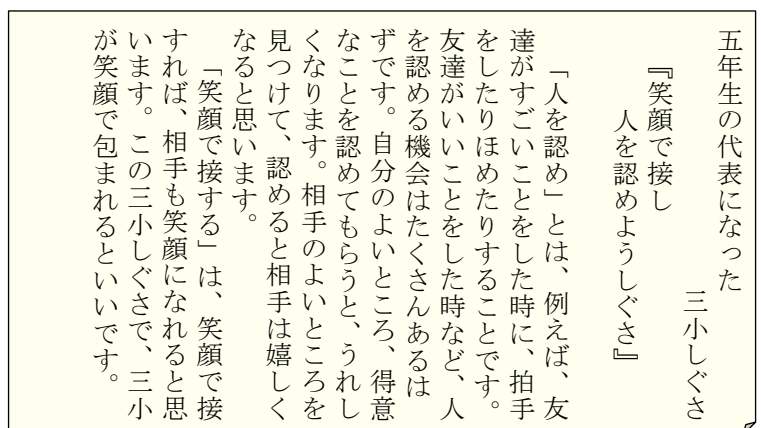
第1回 人権集会 平成24年6月27日

一人ひとりが考えた人権標語と、6年生は人権作文を発表した。「こうていで みんなであそぼ なかよくね」(1年生)、「かつてに“あだな” わたしはいやだな きみもかな」(2年生)など、低学年の児童の感性と表現の豊かさに、心にほっこりとした暖かい風が吹くようであった。6年生は「戦争や争いごとの原因は偏見や差別です」と、自分を大切にするように人を大切にするという人権の本質に迫る人権作文であった。

第2回 人権集会 平成25年1月21日

『三小のみんなが仲良くするために』をテーマに、人権について考えた。一人一人が作文を書き、クラスで話し合いをし、代表者が発表をし。「相手の気持ちを考えて、言葉を言いたいです。なぜなら、いい言葉を言われると嬉しくなるからです。(1年)」「友達の失敗を笑わないようにしていきます。一生懸命やっていると笑われたら嫌な気持ちになるからです。(4年)」等など、真剣な気持ちが伝わってきた。

今年度は、第3回目「三小しぐさ」の発表、第4回目「人権作文」の朗読を行った。



言語能力向上推進校 報告書②

3 言葉を大切にする学校 その2【専門家の招聘・・・アナウンサー】

自信をもって自分を豊かに表現するために、「話すこと」「話し方」に着目して、プロのアナウンサーを招聘し、子供たちに指導していただいた。また、教員向けの研修会も開催し、指導方法について学んだ。さらに2月26日には音楽家の吉岡しげ美氏をお迎えする予定である。

(1) 話し方教室 7月11日(木)

NHK元アナウンス室長 木原秋好氏をお招きして、「相手に伝わるように話す」ことにかかわり、『話すこと』特有のポイントについて、子どもたちの実際の発表活動を通して学んだ。

“榛名のよさを5年生に伝えよう”の最後の仕上げに、プロ中のプロにご指導をいただき、子供たちは5年生に発表する自信が高まった。貴重な体験である。



(2) 教員研修 7月11日(木)

午後は教員を対象とした『話すこと』の研修を実施した。本校の「三小ノート」にあるイメージマップの発想がとても重要であること、文章を全部覚えるのではなく、大事なことをキーワードで把握

ること、頭に浮かんだメモを基に話を組み立てること等のご助言をいただいた。その他、語彙の増やし方、発生の仕方等、児童への指導方法も多岐にわたりご教授いただいた。



(3) 話し方教室 6月25日(火)・12月20日(金)

民放テレビ局(フジテレビ)のプロのアナウンサー 佐々木恭子氏をお招きして、話し方教室を開催した。対象は6月25日が5年生、12月20日が3・4年生である。

「伝わるように伝えるのがスピーチです。そのために、相手の五感にうったえ、情景が目の前でありありと浮かぶように、声の大きさ、内容、表現を大切にしましょう。」と、スピーチの練習をした。



(4) 朗読教室 12月20日(金)

5校時には体育館に場所を移し、引き続き、ご指導をいただいた。朗読の仕方の教室である。対象は3年生と4年生であるが、2年生も参加した。まずは、「風がびゅんびゅん吹いている」というセリフを読む練習をし、児童と一緒に全身を使って言葉を表現した。「ごんぎつね」「サーカスのライオン」を普段は味わえない、真の迫力のある朗読をしていただき、プロの迫力に驚嘆した。



言語能力向上推進校 報告書③

4 言語能力指導メソッド【三小メソッド】

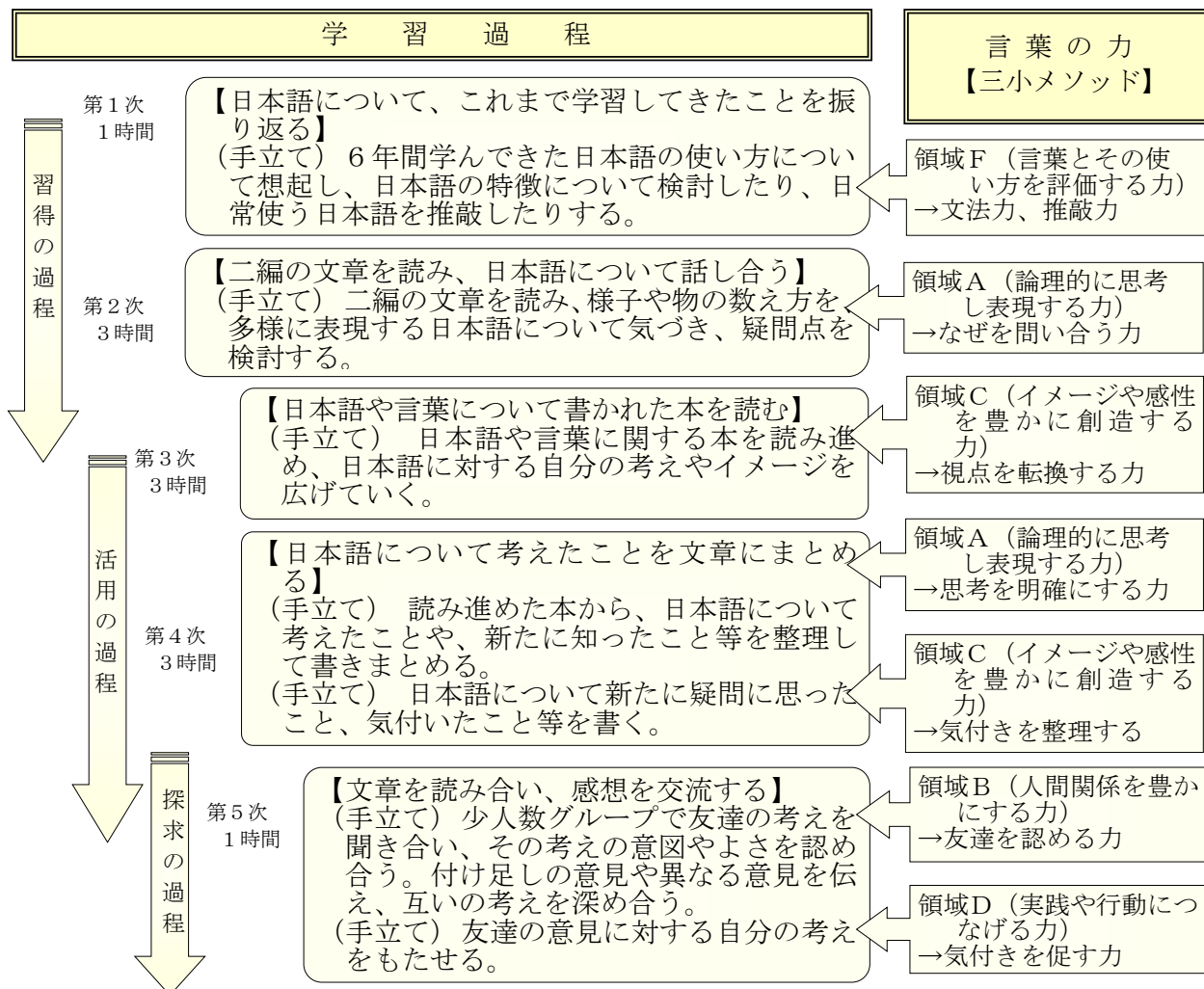
田中博之氏（早稲田大学教職大学院・教授）の「言葉の力を育てる教育メソッド」と、その理論的基盤である「フィンランド・メソッド」の指導法をもとに言語能力を6領域 20 項目の力に整理した『言語能力指導メソッド〔三小メソッド〕』を推進した。

領域 A	論理的に思考し、表現する力	論理を組み立てる力 思考を明確にする力 なぜを問う力	領域 D	実践や行動につなげる力	正義を訴える力 気づきを促す力 企画を立てる力 やる気を起こす力
領域 B	人間関係を豊かにする力	よさを認める力 笑わせ和ませる力 励まし応援する力 心を伝える力 合意を形成する力	領域 E	自分を励まし創る力	自信をつける力 成長を祝い合う力 生き方を描く力
領域 C	イメージや感性を豊かに想像する力	イメージを創る力 感性を高める力 人の心を癒す力	領域 F	言葉とその使い方を評価する力	言葉を評価する力 間違いを正す力

そして、「言葉の力(言語能力)」全体をバランスよく高めていくように、国語の全学年・全単元における学習過程において、この三小メソッドを踏まえた指導を展開した。

〔言語能力育成カリキュラム例〕

第6学年・単元「豊かな日本語の使い手になろう」（国語：1 1時間扱い）

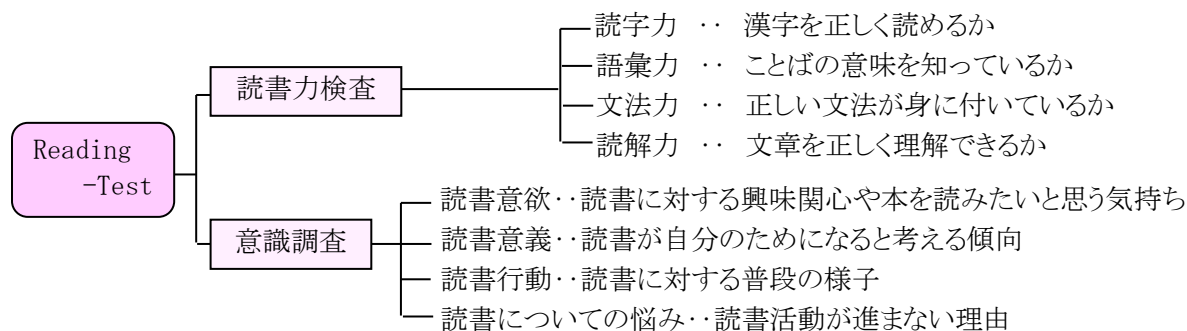


言語能力向上推進校 報告書④

5 児童の変容【リーディングテスト】

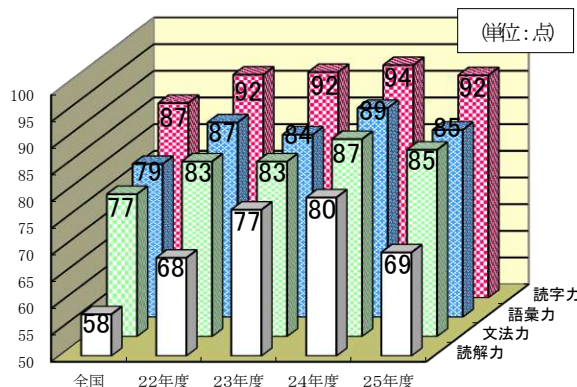
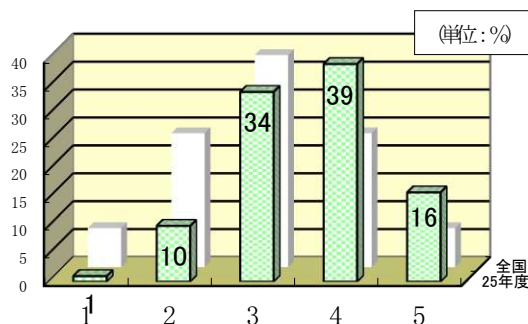
3年間にわたる研究をととして、多岐にわたる検証を行った。とりわけ、児童の変容に関して、(1)読書調査〈4年以上〉、(2)学校図書館関連テスト〈6年〉、(3)読書力診断検査〈6年〉、(4)学力調査〈5年〉により成果を測定してきた。

ここでは、児童の変容が把握しにくい、『読書力』(文章の内容理解を含む「書かれたもの全般を読む力」)の成果検証について述べる。



左下図は今年度6年生を対象に実施した結果である。5段階評価で、全国平均は正規分布であるのに対して、本校の『読書力』は全国と比較してかなり高いことが分かる。

しかし、本校の『読書力』を「読字力」「語彙力」「文法力」「読解力」に分けて経年で比較すると、けっして右肩上がりに伸びているわけではない。各年度の学力の高低に左右されるのは当然であるが、それでも全体的に高い推移を維持していることが分かる。とりわけ「読解力」は全国平均に比べて極めて高い。



さらに、読書に対する意識には、顕著な変容が見て取れる。「字を読むのは辛い」「本を読むのは面倒」「何を読んだらよいのか分からない」「面白い本が見つからない」と悩みを感じている児童は、研究前年の22年度はすべてが全国平均よりも高い傾向にあったが、大幅に好転した。

とりわけ、「何を読んだらよいのか分からない」「本を読むのは面倒」は極めて状況が良くなっている。このような読書に対する意識が着実に改善されてきたのは、大きな成果と言える。

6 おわりに

本研究は、すべての教育活動を通して「言葉を大切にする学校」の体系化、教科等の指導を通して「言語能力育成カリキュラム」(三小メソッド)の開発、この2本を柱に据えて取り組んできた。3年間の報告書を振り、一定の成果を上げることができたと自負している。研究のための研究に終わることなく、今後も継続して実践していきたい。

